

---

# カノン

R A N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カノン

### 【Nコード】

N3335R

### 【作者名】

RAN

### 【あらすじ】

彼のピアノの音が忘れられなかった。

ただそれだけで憧れの人を追いかけた少女。ただとその憧れの人には一癖も二癖もあった。

サイト、dノベ転載

## カノン【1】

私がピアノを始めたのは、彼の演奏を聴いてからだった。

私がまだ小さい頃、母の知り合いがピアノ教室をしていて、その演奏会に連れていってもらった時のことだった。

私はその時はあまりピアノなどに興味はなかったのだが、私と同じ年ぐらいの少年ステージに出てきて、少し興味がひかれた。

母も隣で、千華と同じ年ぐらいね、と私に言った。

そして、少年の演奏が始まった。

その瞬間、私の目の前の光景は一変した。

目の前には、一面の花畑が広がっていた。

そこに咲いているのは白い小さなかわいらしい花ばかり。

少し歩くと、すぐにも埋もれてしまいそうな小川が、澄んだ水が流れていた。

最初は、小さな花を潰してしまいたくなくて、小川に沿って、ゆっくりと私は歩いていった。

でも、だんだんと、こらえきれずに私は花畑を走り出す。

足を踏み出すたびに、花の香りか、甘くて爽やかな香りが私を包んだ。

足はどんどん軽くなり、私はますます足を速く進めようとする。

すると、向こうに光り輝く階段が見えてきた。

どんどん階段は近づいてきて、ついに私は階段の前に来た。

私は臆することなく、その階段を駆け上がったいく。

だんだん急になっていくが、不思議と疲れは感じなかった。

むしろ、高揚感が私を支配していた。

私はどこまででも昇っていく。

白い霧の中に入り、その中でもどんどん突き進んでいく。

そして、靄の先に扉が見えた。

観音開きの白くて重そうな扉だった。

私は、走るその勢いのまま、扉を押す。

すると、扉は意外と軽く、簡単に開いた。

その先は、ただ光が眩く　　。

気づくと、周りは拍手の音に満たされていた。

どうやら演奏は終わったようだ。

私は慌てて、周りと同様に拍手を送った。

呆けていて、きちんと拍手ができなかったのが今でも悔やまれる。

そして、その瞬間、私は決心をした。

演奏会が終わると、すぐに母に言った。

「お母さん、私あの教室でピアノを習いたい」

## カノン【2】

そして今に至る。

私はあれからピアノ教室に通い、あの曲がパツヘルベルの「カノン」だということを知った。

そして、それを惹いていた彼が「千堂歩」という名ということもその腕前を認められ、プロの教育をしてみないか、という誘いもあつたそうだ。

だけど、結局私は、その演奏会以来彼を見ることはなかった。その代わり、彼を知っている友人ができた。

ピアノ教室の先生の娘さんで、「本上みなみ」という子だ。

彼女のおかげで、彼は高校生になってピアノ教室をやめたのだが、その進学した高校を教えてもらえたのだ。

そして私は、無事にこの春彼と同じ高校に合格し、今その高校にいる！

「……千華さん、杉原千華さん。もしもし」

そんな私を呼び戻す声があった。

友人、もう親友と言っていていいほど仲良くなったみなみちゃんだ。

「……あ、ごめんごめん。何？」

「ドリーム入ってるトコ悪いんだけど、もう学校終わりましたよ。

これからどうします？」

「え……ええ?!」

私は慌てて周りを見る。

確かに、教室に残ってるのは数人で、明らかに放課後の雰囲気である。

「い、いつのまに……?」

「ここに来て嬉しいのはわかるけど、いい加減落ち着かないと、まともに高校生活送れないよ?」

みなみちゃんは明らかに呆れた顔をしている。

私は恥ずかしくて、彼女の顔も見れない。

「……う、うん……」

「まあ、とりあえずさ、これからどうするの?」

「……どこか行く所あるの?」

私はみなみちゃんの質問がわからず、そう聞き返した。

「私が聞いているんだっての!」

みなみちゃんは声を大きくした後、大きくため息をついた。

「あ、ああ、ごめん……」

「まあ、入学式早々だともないかもしれないけどさ、部活見に行くーとかさ、たるいからすぐ帰るーとかでもいいからさ。だいたい、あんたドリームばっかりで、実際千堂歩には会えてないんだから、まずはヤツを探すとかさ、ない?」

私はみなみちゃんのその言葉を聞いて、思い出したように椅子から立ち上がった。

「そうだ! 歩さんを探さなきゃ! とりあえず一個上つてのはわかってるけど、クラスなんてわからないし……」

「まあ、落ち着け。闇雲に探したって、大変なんだからさ。いきなり先輩方の教室行つたって何コイツって目つけられるのがオチだし。ここはゆっくりいきましよう」

みなみちゃんは私の肩に手を置いて、椅子に座らせた。

いつもみなみちゃんはこうやって私に色々してくれるので、本当に頭があがらない。

「でも、どうしたらいいのかな?」

そして、結局そのみなみちゃんに頼るしかない私。

みなみちゃんは、私に笑顔を向けた。

「私、陸上部に興味あるんだよね。だから陸上部の練習をこれから

見に行こうと思ってるんだ。で、そこから先輩方と仲良くなって、千堂歩につながる情報を探るってのはどうですか？」

「……いいね！」

みなみちゃんの提案に私は食いついた。願ったり叶ったりだったから。「でしょ。したら、さっそく行かない？」

みなみちゃんも嬉しそうに、人差し指を立てて、外を指し示した。「で、でも、私は全然運動なんてできないよ？」

私はそれが心配で、少し不安そうな顔をしてみなみちゃんに言ったと思う。「友達の付き合いで来たんですって言えば、そんな無理強いはされないでしょうよ。だいたい見学なんだしさ。千華は意外と断るのはうまいから大丈夫よ」

「なんかひっかかるけど、それでいいなら、じゃあ一緒に行ってみようかな」

「よし、そうこなくっちゃね！」

そして、私とみなみちゃんは陸上部の練習しているグラウンドに来ていた。

みなみちゃんは楽しそうに先輩方とお話をしている。

私はスポーツは苦手なので、話題についていけず、後ろでただ笑っているしかできなかった。

みなみちゃんは頑張ってくれて、さりげなく歩さんのことについても聞いてくれた。

みなみちゃんはその場の空気に溶け込むのがうまいと思う。

特定の人物の話題を切り出すなんて、なかなか初めての人には疑られてしまうというのに。

それとなく私が歩さんのことについて知りたい、という風にならなく、聞くとどれもあまりいい噂ではなかった。

愛想がないとか、暗いとか、付き合いが悪いとか、怖いとか、何

考えてるかわからない……とか。

聞けば聞くほど気分が重くなる話題だった。

みなみちゃんも、明らかに私に気を遣っているのがわかる。

みなみちゃんに気を遣わせてばかりの私って、情けない。

打ちひしがれていた私に、最後に朗報が来た。

陸上部エースの「倉田昌宏」さんという人が、歩さんと仲がいい  
というのだ。

だが、さすがにここでその人に取り次いでくれ、というのはまず  
いだろう。

そこまで聞いて、みなみちゃんは入部したい旨を先輩方に伝え、  
私達はグラウンドを去った。

「これでどうよ、千華」

「本当に助かったよ！ みなみちゃん！ ありがとう！！ 大好き  
ー！」

私はみなみちゃんの両手を掴んで、大きく揺さぶった。

みなみちゃんも嬉しそうな笑顔で答えてくれた。

「そうかそうか。とりあえず、クラスは聞けたから、あとは自分で  
頑張りな。まあ、私の方も突っ込め そうだったらそれとなく聞い  
てみるよ」

「うん、頑張る！」

そうして、私とみなみちゃんは別々の帰路についた。

そう、歩さんのクラスはわかった。二年C組だという。

これは、さっそく明日から行動開始だ！

私は燃えていた。

### カノン【3】

そうして翌日、私はさっそく準備をして学校に来た。

まずはやっぱり挨拶も兼ねてお弁当作戦だと思った私は、朝早く起きて、自分の分と一緒に、もう一つお弁当を作った。

自分のよりさらに気合を入れて。

私はそれをさっそくみなみちゃんに見せた。すると

「いや、いきなりお弁当ですか」

みなみちゃんにまた呆れた顔をされてしまった。

「……なんか、変？」

「いきなり弁当ってさ……いつの時代の乙女ですか」

「……………」

私は肩をすくめて、机の上のお弁当に視線を落としたりした。

「……いや、でも、努力は報われるよ、きっと。まずは行動しないとね、うん。何もしないってのはダメだからね。……だけどさ、作ったはいいけど、あんたどう渡しに行くの？」

みなみちゃんはフオローしてくれてるのが、声を優しく変えてそう言った。

「あ……………」

みなみちゃん言葉に、私は思い至った。

作るのに夢中で肝心なことを忘れていた。

入学式翌日に、先輩方の教室に行くのはまずいだらう。

ましてや知ってる人がいるわけでもない。

みなみちゃんも、まだ陸上部に入りたてで、尋ねれる先輩もいないだらう。

まさに予感があたって、という顔をして、みなみちゃんは呆れたを通り越して、笑みをうかべている。

「……直感にかけてみる？」

そして、そう提案をしてくれた。

「どういうこと？」

「教室から出てくる、千堂歩っぱい人に渡すんだよ。恋の力でヤツを見抜け」

今思うと、みなみちゃんは冗談で言っていたのかもしれないが、私はそれを本気にした。

「よし、それに賭けてみる！ さっそく移動教室じゃないか見てくるよ！」

そして私は椅子から立ち上がる。

「ち、千華?!」

その私に驚いて、みなみちゃんも立ち上がる。

だが、私はもうすでに教室から出て行った後だった。

二年C組の前に来ると、ちようどどこかに移動するところだった。

ここまで来たはいいが、ちよつと人が多すぎた。

見慣れないヤツがいる、という視線が刺さってくる。

でもここまで来たからには引けない。

私はなんとか目をこらして歩さんらしき人を探した。

すると、目を引く人が一人いた。

確証はなかったけど、私はその人だと思った。

学生服に溶け込むような真っ黒な髪と目に、見覚えがあるような気がした。

ちようど教室の後ろ側出てきて、私に近い所を歩いてくれたのも運が良かった。

「すみません！」

呼び止めると彼は動きを止めてこちらを見た。

横にお友達もいたようで、一緒に止まってこちらを見る。

他の人達も、移動しながら何だろうという好奇の目で私を見ていた。

私は恥ずかしいのと、緊張とで顔が熱くなっていた。

だけど、これだけはしないと！

「あ、あの、これ、よかつたら食べてください！」

それだけ言うのが精一杯で、お弁当を手渡すと、私はその場から走り去った。

その後、お弁当がどうなったかなんて私は知らない。

それが歩さんだったかどうかもわからない。

でも、とりあえずお弁当を渡すことができた。

それだけで満足だった。

ただ　　これからはもう少し計画的に行動するようによつと思  
った。

## カノン【4】

教室に帰ってきた私の心臓は、激しく鼓動を繰り返していた。

「千華、どうだった？」

勢いよく教室に入ってきた私に、みなみちゃんが話しかけてくれた。

私は、思わず苦笑いを浮かべてしまった。

「とりあえず、渡してきた」

「渡した、だけ？」

みなみちゃんは、やっぱり、というように、どこか悪戯っぽい笑みを浮かべて私を見た。

「うん、やっぱりなんか恥ずかしくなっちゃって、渡して逃げてきちゃった」

「相手も困るだろうに」

「まあ、とりあえず渡せたからいいよ」

「それじゃあ、何も取っ掛かりがなくなっちゃうじゃないのさ」

みなみちゃんに言われて、私はまたはっとさせられた。

「……………あ……………」

言葉が出てこず、変な声しか出なかった。

みなみちゃんは、何とも複雑な笑みに顔を歪め、私の頭を軽く叩いた。

「とりあえず、今日部活あるから、何とか探りを入れてみましょう。あんたも、とりあえず学校の中でもうろついてみればいいんじゃない？ 部活見学とか」

「あ、うん、ありがと。…………でも、部活には入れないから、見学とかはできないけど。時間見つけて学校の中回ってみるよ」

みなみちゃんは、私の言葉に、少し悲しげな顔をした。

「あ、そうだね。千華はバイトがあつたね」

「うん。でも朝早くとかなら来れるからね。私もみなみちゃんに頼ってばかりもいけないし！」

私は、両手で拳を作つて、笑顔を見せた。

すると、みなみちゃんは私に抱きついてきた。

「もう、なんてあなたは可愛いんだー！ むしろ私の嫁に来ーい！  
みなみちゃんは、本当に私を大事にしてくれる、と思う。」

ただ、たまに人目を気にしないところがあるのは、どうにかなら  
ないかな、と思う。

私が人のこと言えたものじゃないのは、わかっているけど。

そして、また翌日。

高校生になってから、私は毎日が楽しくてしょうがなかった。

歩さんと同じ高校にいる、という気持ちだが、私の心を浮き上がら  
せる。

今日はとりあえず、昨日みなみちゃんと話していた通りに、まず  
は学校を回ってみることにした。

放課後はやはりバイトのために、あまり残れないので、朝早く学  
校に来ることにした。

念のため、今日もお弁当は二人分作つた。

何と言われようと、これだけは譲れなかった。

そして、私は今、学校に入り、そのまま学校の中を回っていた。

とりあえず教室に行くまで遠回りをして、学校の中を歩こうと考  
えたのだ。

すると、玄関から歩いてすぐに、何か音が聞こえてきた。

何かひっかかって、私は音のする方に歩いていった。

私の行く方は、音楽室、美術室、技術室、被服室など、作業実習室が固まっていた。

そして、音は音楽室から漏れていた。

ピアノの音だった。

その曲は、聞き覚えのあるものだった。これは 悲愴。

ベートーベンのピアノ・ソナタ第八番「悲愴」の第三楽章だ。

確か、何たらとかいう伯爵に献上したとかしなかったとか。

この第三楽章はよくテレビなどでもかかっていた、なじみがあったので、私は好きだったりする。

だけど、聞こえてくるこのピアノの音には、何か違和感を感じた。

私は、もっと音がよく聞こえるように、ゆっくりと音楽室に近づいた。

今度は音がはっきりと聞こえてきた。

音楽室は大抵防音がされているが、ドアだけは防音されておらず、近づくくと結構音が聞こえてくる。

そして、私は音に感じた違和感が何かわかった。

まるで怒ってるみたい……。

誰かはわからないが、まるで怒っているように弾いていたのだ。

必要以上に強く鍵盤を叩き、やたらに速度が速い。

ああ、今ちようど終盤にさしかかっている。

この調子でいくと

ド  
ン！

私は思わず耳をふさいでしまった。

最後の和音の部分は確かに弱い音ではないが、ここまで強く弾くものでもない。

だが、先ほどの速さから何となく、勢いによって音が大きくなることは予想できた。

これは、ひどい。

曲をあんなに早く弾いても音をもらさない技術はあるから、腕はあると思われるが、曲に対する感情の入れ方が何か違っていている気がした。

私は、誰がこの演奏をしたのか気になり、ドアの窓からこっそりと中を覗いた。

すると、そこにいたのは

歩さん！

音楽室のグラウンドピアノの前に座っていたのは、昨日お弁当を渡した人だった。

確認はしていないから、歩さんだとはわからないけど、私は信じている。

私は、思わずドアを開けていた。

歩さんは、突然の訪問者に驚いた顔をして、こちらを見た。

そして、私を睨みつける。

私は、その目を見て、自分の現在の状況を改めて考え直した。

これはやっぱりまずいのではないだろうか。

朝、学校にはあまり人はいない。

そういう所に来る人は、あまり人のいる場所を好まないことが多い。

もしかすると、歩さんも、あまり自分のピアノを人に聞かれたいなかったのではないだろうか。

それなのに、私がこんな盗み聞きするような真似をしておいて、さらには前に現れるなんて。

印象最悪じゃないですか！！

「ああ、お前はお弁当女」

私がおそのような思考を脳内で繰り広げ、今更ながらに冷や汗を流しているところに、歩さんが声を出した。

歩さんの思ったよりも深刻そうでない声に、もしかしたらさっきの表情はただ考え込んでいるだけだったのだろうか、と思い直した。何より、歩さんが私のことを覚えていてくれたのが嬉しかった。

私は、思わず顔がにやついてしまった。

「そ、そうです！ 覚えててくださいましたか！」

「いや、そりゃ、あんな突然弁当なんか渡されたらな」

私は、もう恥ずかしいのか嬉しいのかわからない笑みをうかべていた。

「あ、あの、お、お弁当……食べてもらえましたか……？」

「ああ。食べ物は粗末にしちゃいけないからな」

歩さんは淡々とした口調と表情で話し続ける。

「あ、あの、お味はどうでしたか？」

「……まずはなかった」

「そうですか！」

私は、とりあえずそれだけ聞けて嬉しかった。

天にも昇る気持ちとは、このことを言うのだと思った。

「お前」

私が一人で喜んでいるところに、歩さんが戸惑い気味に声をかけた。

「は、はい！」

私は先ほどの嬉しさをひきずった笑顔のまま、慌てて返事をした。しかし、歩さんの厳しい表情を見ると、思わず顔が強張ってしまった。

その目は、刃物のように鋭くて、冷たかった。

「  
どこの誰だか知らないが、俺の前にこれ以上現れるな」

## カノン【5】

「え？」

私は思わず聞き返してしまっていた。

「俺の前に二度と現れるな」

歩さんは、また繰り返して言った。

その度に、私の中にその言葉は針のように入り込み、鈍い痛みを残す。

「なぜですか」

私は、呆然としたまま、声だけが出ていた。

「理由は聞くな」

歩さんの表情は変わらない。

それが余計に私を混乱させた。

しばらく何も言葉が出ず、ただ歩さんの顔を見ていた。だが、そこで

キーンコーンカーンコーン。

始業のチャイムが鳴った。

私はそれでやっと我に返った気がした。

歩さんも、ピアノの蓋を閉じ、布をかぶせて、出ていく準備を始めた。

このままでは、また歩さんに会えなくなる。

私は焦って声を出した。

「私、杉原千華っています！ 理由を聞かせてもらえるまでは、

あきらめるつもりありませんから！」

我ながらよく言ったものだ。

言った瞬間に、私の顔は上気していた。

歩さんは、興味がなさそうに一度私を見て、すぐに音楽室から出て行ってしまった。

私は少しの間、歩さんが出ていったドアを見ていた。

「千華、今日はどうしたの？」

ホームルームが終わった後、みなみちゃんが私の所に来てくれた。あまり教室にギリギリで来ることのない私が、今日は先生と同時に教室に入ってきたので、気にしてくれたようだ。

「ん……別に……」

私がおつかどうしようか迷っていると、みなみちゃんは怖い顔をして、私の肩に手を回した。

「千華あ。私に秘密は通用しないよー。さあ、吐け、全て吐け」

どこか黒さを持った笑みで、私の顔の輪郭をなぞるように言う。

こういう時のみなみちゃんには逆らわない方がいい。

「わ、わかったよ。あのね……」

私は、朝のことをみなみちゃんに話した。

聞くうちに、だんだんとみなみちゃんの顔が険しいものへと変わっていく。

私の嫌な予感が増すばかりだった。

「何それ」

一通り話し終えた後の、みなみちゃんの一声はそれだった。

私は、みなみちゃんらしい反応に、苦笑いを浮かべてしまった。

「何それ、と言われても……」

「っていつかさ、私前から思ってたんだけど、千華ってあんなヤツのどこがいいの？」

「どこがと言われても……」

みなみちゃんは、歩さんが通っていたピアノ教室の娘だったから、少しかだけ歩さんと面識があるようだった。

どれほどのがあつたかわからないが、歩さんへの印象は悪いらしい。

「私は正直気乗りしなかったけど、千華が熱心だから協力してたのよ。だけど、そんなこと言われてまで千華が千堂歩を好きなのが、私にはわからない」

「でもね、私は歩さんが好きなの」

私はみなみちゃんをちゃんと見て、言った。

これだけは、間違いなく、ちゃんと言えることだった。

みなみちゃんに何と言われようと、私の気持ちは変わらない。

どうしても、歩さんをあきらめることはできなかった。

すると、みなみちゃんはため息を吐いた。

恐らく、こいつはしょうがないな、とでも思っているんだろう。

「まあ、なったもんはしょうがないから、最後まで協力するよ。実はね、昨日部活に行ったら、千堂歩の親友だつていう倉井先輩に話しかけられたのよ」

私は、みなみちゃんの言った名前に、ピンときた。

そういえば、このあいだ陸上部の見学についていった時に、その名前を聞いた気がする。

歩さんの親友で、確か陸上部のエースの倉井昌宏先輩。

私が明らかに気になります、という顔をしていたのか、みなみちゃんは一旦話を切った。

だが、私が続きを待っている様子を見てか、すぐに話し出した。その顔はあまり明るくなく、歩さんの話題以外に、何か嫌なこと

があるのではないかと、私は感じた。

「うん、まあ、話しかけてくれて、ね。それで、千堂歩に会えるように頼んだの」

「ホントに?!」

私は思わず、大声を上げて、椅子から立ち上がった。

教室中の皆が、驚いてこちらを振り向く。

私はすぐに気づき、みなみちゃんと共に苦笑いを浮かべ、また椅子に落ち着いた。

私達二人は、さっき以上に顔を近づけて、小さい声で話した。

「ど、どうということなの?」

私はまだ興奮さめやらぬまま話を切り出す。

「うんとね、向こうの提案だと、こないだみたいにまたお弁当を渡しに来たら、倉井先輩が歩と話せるように取り計らってくれるって言うのよ」

みなみちゃんは、どうも話すのが嫌なのか、目をそらして口の中で言葉を濁らすように話す。

だが、願ってもないチャンスがきた私は、みなみちゃんの違った様子に気づかなかった。

「本当に? 本当に?」

嬉しくて、何回も私は尋ねてしまった。

「うん。嘘だと思っなら、今日行ってみれば? どうせお弁当、あるんでしょ?」

みなみちゃんは呆れも含んだ苦笑いを浮かべたまま、机の横にある私の鞆を指差した。

「えへへ。まあね」

私は鞆を軽く叩いて、少し自慢げに言った。

「私が作ったチャンスなんだから、頑張るのよ」

みなみちゃんは、私の額に人差し指をあてた。  
私は全てが嬉しくて、頬の筋肉いっぱい口を持ち上げて笑みを

浮かべていた。

「うん、頑張るよ！」

RAN            \* \* \* 2006 / 9 / 10 \* \* \*

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3335r/>

---

カノン

2011年7月5日03時21分発行